

(4) 住民2年で1割増加、過疎高齢化に歯止め**鹿児島県鹿屋市柳谷**

大隅半島の真ん中、鹿児島県鹿屋市の柳谷集落では、この2年で住民が11%も増えた。「近いうちに高齢者が50%を超えるのではないかと心配していたが、人口増の勢いは止まりそうもない」と柳谷町内会の豊重哲郎会長（67）。自治会長を引き受けてから10年、耕作放棄地を活用した収益事業で財政を豊かにし、集落の生活環境と住民意識の改善に取り組んできた。その効果が目に見える形で過疎・高齢化の歯止めにつながってきたのだ。

「近所の人たちが親切でとても暮らしやすい」。一昨年1月に石川県から集落に移り住んだ画家の大窪頭子さん（25）は広い庭のある大きな家に住む。昨年末に北海道からやって来たばかりの画家、三谷正（29）さんも落ち着いた環境でじっくり仕事ができると満足そう。この2年間に画家や陶芸家、写真家、ガラス工芸作家ら10人ほどが集落の空き家に移住してきた。若手のアーティストを公募して住んでもらおうという作戦だ。「若い芸術家が住むようになれば、集落の雰囲気や住民意識も向上し、地域再生につながる」と豊重会長。

昭和30年（1955年）前後には500人もいた集落人口は2006年に285人まで減少。豊重会長は「そのまま過疎が進めば2024年には高齢化比率は55%に達する」と予想していた。だが、空き家活用作戦で若手芸術家にUターン組みも加わって07年は301人、08年には314人に回復、高齢化比率も33%程度と逆にやや低下してきている。



ブロンズ作家や画家らアーティストが集落の空き家で暮らす（柳谷）

移住作戦がヒットしたのは、収益事業に力を入れ、空き家改修など生活環境を自ら整備できるまで財政を強化してきたからだ。「行政に頼らずに自分たちで地域起こしをするためには、まず町内会財政の自立が必要」と豊重会長は強調する。柳谷町内会の収益事業は遊休農地を使ったサツマイモの栽培からスタート。いまでは柳谷ブランドの芋焼酎の生産・販売や土質改良効果のある土着菌（微生物）培養と畜産向け販売などの事業に広がってきた。集落が経営する食堂や宿泊施設、アーティストらの作品を展示販売するギャラリーなども収益につながる。生産販売や施設整備などの仕事は集落住民がボランティアでこなす。年間収入700万円、毎年200万円程度の余剰金を生むまでになってきた。06年には町内会110世帯に1万円ずつのボーナスを支給したほどだ。

収益事業は手段、目的は公益サービス

だが「収益事業はあくまで手段。住民の福祉や人づくりなど公益事業が本来の目的」と豊重会長。住民から「利益は配分しないで町内会の公益サービスに使って欲しい」という要望が大きい。余剰金が出ると、町内会の高齢者、子供育成、文化、環境整備など6部会の事業に補助する。住人が労力を提供する収益事業を元に、町内会が「1つの役場」のような機能を果たす。余剰金で高齢者へのシルバーカート、緊急警報装置も支給した。福祉や生活環境が充実すればI・Uターン者をさらに引きつける要因にもなる。

「やっと再生へのスタート台に立った段階。次は農業Iターンを集落に呼び込む」と豊重会長は次の手を準備している。590haの水田と2500haの畑、27haの放牧地が広がる農業地帯だが、高齢化と後継者不足で遊休地が増えるばかり。「農地と技術、機材に住まいも貸せるので、農業を志す若者ら6人程度を募って、空き家で寄宿生活しながら土作りから5年程度の研修をしてもらいたい」。新規就農を目指す若者らを農家で実地研修しながら育て上げ、いずれは集落農業の後継者として定着してもらおうという考えだ。